

平成 22 年度(2010 年度)

中世スペインから考える現代のテロ問題

慶應義塾大学法学部政治学科

上之蘭亮

—目次—

第1章 はじめに 戦争とテロリズムは、「宗教的動機」によるものか

第1節 テロ問題

第2節 問題意識

第3節 仮説

第2章 中世スペインにおける共存とレコンキスタの実態

第1節 レコンキスタとは その歴史

第2節 領土紛争としてのレコンキスタ

第3章 「聖戦」にされたレコンキスタ

第1節 レコンキスタはどのようにして「聖戦」とされたか

第2節 聖ヤコブ(サンティアゴ)とレコンキスタ

第4章 レコンキスタは「聖戦」ではない 戦争作法、宗教建築からの考証

第1節 戦争作法の違いからの考証

第2節 宗教建築からの考証

第5章 異教徒に対する認識の差異の根源

第1節 ベルベル人とフランクの侵入

第2節 異教徒は未知の観念的な敵

第6章 結論 結びにかえて

第1節 他者を知ることの必要性

第2節 宗教的対立解決のためのヒント

主要参考文献

第1章 はじめに 戦争とテロリズムは、「宗教的動機」によるものか

第1節 テロ問題

2004年の3月朝、マドリッドで爆弾テロ発生。ETA¹の犯行かと思われたが、「アブ・ハフス・アル・マスリ隊」と名乗るアル＝カーイダ系イスラーム過激派組織が犯行声明をだした。この事件では191人が死亡、200人以上が負傷した。その犯行動機はスペインのイラク派兵への不満であり、これを受けた三日後の選挙で国民党アスナール政権は退陣、即時撤兵を掲げた社会労働党が新政権を握った。この事件は図らずもテロリズムによって国家の動向が大きく左右されるということを示す結果となってしまった。²

スペインによるイラク派兵の原因となったのは2001年9月11日に起こったアメリカ同時多発テロ事件である。ウサーマ・ビン＝ラディンを精神的指導者と仰ぐ国際テロ組織アル＝カーイダによって引き起こされたこの事件では、合計すると2973人の命が奪われたという。このアメリカ同時多発テロはアメリカ合衆国にとっては真珠湾攻撃以来の本土への成功した奇襲であり、アメリカ国民に与えたインパクトは計り知れない大きさであった。そのためアメリカは対テロ戦争に一国でも突き進む意欲を見せ、その状況はアメリカ単独覇権主義の再来と言われた。またこのテロはそれまでの国際政治学を変え、国家主体だけではなく非国家主体の戦闘行為に対しても考慮が必要な時代であることを示した。

ではこのアメリカ同時多発テロ事件の原因、つまりウサーマ・ビン＝ラディンの動機はなんだったのであろうか。それは「宗教的動機」であった³。

第2節 問題意識

一部のイスラーム教徒による西洋へのテロ、またその報復のためのキリスト教徒による戦争を見て、当初私は、同じアブラハムの神を信仰しているはずの人達が何故ここまで争うのが理解できなかった。どの宗教も許しと寛容の精神を説いているはずだ。

¹ Euskadi Ta Askatasuna. バスク地方の独立を目指す「バスク祖国と自由」という組織の略称。

² 但し日本赤軍によるダッカ航空機ハイジャック事件などにみられるように、国家がテロリストに屈するのは初めての事例ではない。

³ ローレンス・ライト『倒壊する巨塔 アルカイダと「9.11」への道』平賀秀明訳、白水社、2009年、下巻、22ページ。

戦争ばかりの世界史を紐解くと、ユダヤ教、キリスト教、イスラーム教の三つが混在しながら繁栄を謳歌した時代があることに気づく。中世のスペインである。イスラーム教徒の高い文明水準を享受していた中世スペインは、当時のヨーロッパの中で最も高い文明水準を誇っていた。現代ヨーロッパの繁栄はその恩恵によって成立したと言っても過言ではない。さらに中世スペインには、イスラーム教国家とキリスト教国家が混在し、互いに争い、協力していた時期もあった。また当時のイスラーム教国家では税金を払うことによりユダヤ人は極端な迫害をされずに定住することができた。利害によって争い、協調するという側面が強く、異なる宗教であるから争わなければならないなどということにはなかった。

つまり中世スペインでは、三つの宗教が混在していたといえよう。もちろん完全な平等とは言えない、条件付きの共存ではあったが、この時代を検証することこそ現代の異宗教間に横たわるとされるテロ問題を考えるうえで、何らかのヒントになるのではないかと考えた。9.11 後のアメリカでは中東系移民がイスラーム教徒というだけで排斥を受ける場合もあるという。問題であるのは「テロリスト」であって「イスラーム教徒」ではないのは皆理解しているのだろうが、何分、見知らぬ他者であるために恐怖が募り、排斥に向かうのであろう。しかしこの状況では事態は好転するはずもなく、無知が排斥を生む負の連鎖が起こる。

そこで本稿では西方の十字軍とされるレコンキスタに焦点を当て、宗教対立を考える。イスラーム教とキリスト教の関係に焦点を当て、中世スペインにおいて異なる宗教が共存、その後対立に至った経緯を探り、対立の原因は本当に宗教的問題なのかを考察することが本原稿の問題意識である。

第3節 仮説

仮説として、「宗教戦争とされるものの根源的な要因は経済、領土問題である」という前提を掲げたい。私は宗教間対立の根本的な理由は経済、領土問題であると考えている。確かに宗教の影響はあるだろう。しかし、戦闘行為は外交の延長であり、外交で重要なのは国益である。よって宗教的動機のみでの戦争などは起こりえない。しかし、未だ歴史の教科書ではレコンキスタや十字軍の宗教的側面が強調される。これも、宗教的対立という構図を煽っているようにしか見えない。

経済問題、領土問題が解決されれば、「文明の衝突」のような事態は起きないと思われる。もし起こるとすれば、それは他者を実際に知らないのにイメージが先行し、観念的な敵が実

存する敵となってしまった場合であると思う。私の周りにも、中国人、韓国人が嫌いだという人がいるが、彼らに聞いてみると実際にそれらの人々に嫌な思いをさせられた人はごく少数で、多くは自分のイメージで敵を作っているようだ。また、〇〇人が悪い、〇〇教の人は犯罪行為に走るということはないことを、私も海外旅行で得た個人的経験から実感している。よってビン＝ラディンがイスラーム教徒を代表しているわけでもなく、キリスト教徒は皆文明人であるということもまずないだろう。

戦争もテロリズムも外交の延長であり、正義と悪に別れて戦うなどということはありません、宗教に善悪があるはずもないと私は主張したい。外交で常に争点となるのは「信仰心」ではなく、「利益、国益」である。

そこで以下、レコンキスタの例をとって宗教的対立の根源を考えていく。

第2章 中世スペインにおける共存とレコンキスタの実態

本章の目的は中世スペインの共存の形を記すと共に、レコンキスタがどのような過程を経て、「聖戦」へと変貌していったのかを考察することである。それにより、レコンキスタの聖戦意識が外部より持ち込まれたことを明らかにし、レコンキスタは宗教的対立に限ったものではないことを指摘したい。

第1節 レコンキスタとは その歴史

まず一般に宗教戦争と言われるレコンキスタとは何だったのか、史実を確認する。

8世紀から15世紀末まで、イベリア半島にはイスラーム教圏とキリスト教圏とが混在していた。

シリアのダマスカスに首都をおくウマイヤ朝(661年-750年)は697年に東ローマ帝国(395年-1453年)からカルタゴを奪い、北アフリカを支配下に入れた。その勢いは衰えることなく、711年にはイベリア半島に侵入し、西ゴート王国(411年-711年)を征服した。東はインド洋から西は北アフリカまでを支配圏としたため、地中海はイスラーム教徒の支配するところとなった。つまりイスラームは中世に地中海を失うまで、地中海交易の恩恵を享受することができた。ウマイヤ朝の特徴として、イスラーム教以外の宗教にも比較的寛容であったことが挙げられる。ウマイヤ朝はズインミー(異教徒、庇護民)に対し、イスラーム教への改宗を迫る代わりに

ジズヤ(人頭税)を納めさせていた。よってジズヤさえ納めれば一定の差別のもと、異教徒は自身の信仰を保持したまま生存できたのであった。

新興勢力であるイスラーム教国家が領土を拡大していく中、旧勢力であるキリスト教国家はイスラーム教国家との対立を余儀なくされる。その契機と言えるのが、アストゥリアス王国の誕生である。718年、西ゴート王国の貴族であるというペラヨ(Pelayo, 不明-737年)がアストゥリアス地方でアストゥリアス王国(718年-925年)を建国した。この王国がキリスト教徒の王国であったこと、またペラヨが伝説的なコバドンガの戦い⁴でイスラーム教徒に勝利したことから、718年をレコンキスタ元年と考えるのが現在の通説である。

この後、8世紀から10世紀までイスラーム教優位の時代が続く。特にアンダルス⁵最盛期の10世紀には、キリスト教徒諸侯が朝貢外交のためにコルドバ⁶を訪れている。

だが、11世紀になると形勢が逆転する。レオンを併合したカスティーリャ王国(1035年-1715年)の君主フェルナンド1世(Fernando I, 1017年-1065年)は、イスラーム教王朝に「パリア」と呼ばれる金の貢納金を納めさせ、家臣として従えさせた。だが「貢納と保護」の双務的契約であったこの君臣関係とは、臣下のイスラーム教王国がキリスト教王国に攻撃された場合、カスティーリャはキリスト教王国でありながらもイスラーム王国を守るために援軍を向けなければならないという矛盾を伴うものだった。この点に私は着目したい。なぜなら、カスティーリャ王国が、「カトリック」という宗教的道義よりも領土的・経済的利害を優先していたことを示すこの史実は、宗教的道義のみに着目してきたこれまでの歴史観を覆すものであるからである。

続く12世紀は両陣営緊張の時代である。だが常に戦闘状態にあったのではなく、アラビア語の文献がラテン語に訳され、またキリスト教徒の商人はアンダルスへ買い付けに行く⁷など、文化的・経済的交流も盛んな、相対的に平穏な時代でもあった

13世紀と14世紀は完全なるキリスト教徒の時代となる。1212年ムワッヒド朝(1130年-1269年)はトロサでキリスト教国連合軍に敗れ、北部キリスト教国とアンダルスの力関係は逆転す

⁴ レコンキスタ最初の戦闘として伝説的に描かれているが、実際はかなり小規模な戦いであったとされる。その意味でも伝説的な戦いである。

⁵ 現在のアンダルシア。

⁶ 当時コルドバには、アッバース朝(750年-1258年)に滅ぼされたウマイヤ朝(661年-750年)の後継である後ウマイヤ朝の首都があり、アブド・アッラーフマーン3世(Abdurrhman III, 889年-961年)のもとでアッバース朝に匹敵する繁栄を謳歌していた。

⁷ キリスト教徒商人がアンダルスに買い付けに行ったのに対し、イスラーム教徒商人はカスティーリャに買い付けに行かなかった。これは両国の経済力の差異を表していると考えられる。

る。1236年にはカスティーリャとレオンを統一したフェルナンド3世(Fernando III, 1201年-1252年)⁸によりコルドバが、1248年にはセビージャが陥落する。これによりグラナダを除くアンダルシア全域の再征服が終わり、レコンキスタは事実上終了した。グラナダのナスル朝(1232年-1492年)はその後もカスティーリャ王国の貢納国として存在し続けていたものの、1492年、イスパニア王国⁹のカトリック両王により征服された。この征服でイベリア半島のイスラーム勢力は皆無となった。そしてスペインは大航海時代¹⁰という新たな時代へと向かうことになる。

第2節 レコンキスタは経済的、領土的な問題による紛争である。

レコンキスタ(国土回復運動)とは、キリスト教とイスラーム教の宗教的情熱に基づいた聖戦であり、西方十字軍と同義に捉えられることもある。私も高校の世界史でそのように習った。しかし、前述のフェルナンド1世がパリア体制(金貢納体制)を敷いていたように、実際は宗教的対立ではなく、領土的、経済的要因の方が大きいように思われる¹¹。

また、レコンキスタ元年の状況にも、領土紛争という特徴が指摘できる。イスラーム教徒と武力差のあったアストゥリアス王国下でおこなわれたキリスト教徒の南進は、イスラーム教徒の住まない、国境地帯への入植から始まっている。国境付近の山岳地帯に入植していたキリスト教徒たちは、人口増加と食料確保に悩まされていた。そこで牧羊業に適したより広い土地を求め、イスラーム教徒王朝が内乱¹²で忙殺されているなかで徐々に南進、入植を進めていった。このように、レコンキスタとは辺境への入植を機に始まったものであり、宗教的情熱から生まれたものではなかったのである。

⁸ ルーニー(Lowney, Chris)によれば、Who broke and destroyed all his enemies.

⁹ カスティーリャ女王イサベル1世(Isabel de Castilla, 1451年-1504年)とアラゴン王太子フェルナンド2世(Fernando II, 1452年-1516年)の婚姻関係によって成立した王国。レコンキスタ完了の功績をもって、カトリック両王と呼ばれる。また、成立は連合王国が成立した1479年、レコンキスタが終了した1492年とされる。また、後にハプスブルク家と婚姻関係となり、ハプスブルク君主国を形成した。

¹⁰ 大航海時代を迎えた原因として、レコンキスタの際の略奪により国が潤ったことが挙げられる。羊毛などの地道な産業より、略奪などの経済活動のほうが手取り早く、簡単であった。このことは現在のスペインの国民性にもやや関係してくると思われる。

¹¹ 領土上の問題が重要であったことはJ.A.マラバルが1964年に『中世スペインの理念』で指摘している。

¹² ウマイヤ朝の衰退とアッバース朝の成立(750年)、後ウマイヤ朝の成立(756年)など8世紀、イスラーム社会では争乱が絶えなかった。

第3章 「聖戦」にされたレコンキスタ

第1節 レコンキスタはどのようにして「聖戦」とされたか

ではなぜ、レコンキスタは「聖戦」と呼ばれるようになったのか。その原因の一つとして、「新ゴート主義」があげられる。新ゴート主義とは、アンダルス出身のキリスト教徒によるものである。

アンダルスから移住してきたモサラベ¹³の進言により、アルフォンソ2世(Alfonso II, 760年-842年)の治世下のアストゥリアス王国では西ゴート様式を真似た政治、宗教組織が作られた。また「イスパニアの喪失」と「イスパニアの回復」というモサラベの主張によりペラヨとアストゥリアス歴代諸王が西ゴート王の末裔であるという家系図が作られ、西ゴート王国に対するアストゥリアス王国の正当性が明確化された。これが新ゴート主義である。この新ゴート主義とは、後にアストゥリアス・レオン国がイベリア半島での宗教的優位を主張するのに役立っただけでなく、現在もなおアストゥリアス・ナショナリズムの基軸となっている。モサラベによって編み出された「イスパニアの喪失と回復」のストーリーが、レコンキスタを聖戦と呼ぶ理由の一つにあたる。

他方、ローマ教会の影響も無視できない。11世紀中期から後期にかけ、教会改革運動が興った。この運動は、ローマ教会の指導力を高め、イスラーム教徒から聖地エルサレムを奪回するという意図から、聖ペテロ崇拜、教皇の地位の絶対化、ローマ・カトリック様式の典礼の強制などを通じてキリスト教世界内部を浄化する一方、異教徒の弾圧を強めていくものであった。グレゴリウス7世(在位:1073年-1085年)時代に高まった聖地奪回への情熱は、1095年クレルモン公会議を経て、ウルバヌス2世(在位:1088年-1099年)によって牽引された十字軍の派遣へと引き継がれる。そして第一回十字軍の成功を経て、十字軍はその後すべてのキリスト教徒の事業となり、軍事的、政治的、経済的な企てとなっていく。

十字軍とはこのように当初から「戦闘」を意識したものだ。しかもその「戦闘」とは最高権力者である教皇が主導しおこなう「聖戦」とみなされたのだ。一方レコンキスタは十字軍とは異なり、辺境への「入植」を当初の目的に、対立と強調を繰り返しながら広がっていったが、十字軍の掲げた「聖戦」という概念をそのまま導入した。ゆえに、レコンキスタは国王主導でおこなわれたにもかかわらず、後年「聖戦」と呼ばれることとなる。

¹³ アンダルスにいたキリスト教徒のこと。

またクリュニー修道院もレコンキスタを「聖戦」へと変貌させる事に一役買っている。清貧を是とし、自らの精神世界の充実を目的としたクリュニーは、各地の修道院改革を進めていく過程で世俗的、政治的関心を高めていった。その結果、クリュニーはカスティーリャ国王の要請でイベリア半島にも来訪した際、イスラーム教国家支配下のキリスト教徒がもたらしたモサラベ様式の典礼をローマ様式のものへと変えさせた。また彼らはこの半島で行われていたイスラーム教徒とキリスト教徒の交流を見て、「異教徒は教導されるべき」であるという宗教的情熱から異教徒の駆逐を考えた。だがそれは当時のイベリア半島の政治的、経済的状况に反する企てであった。つまり「異教徒とは戦わなくてはならない」といった観念は、イベリア半島で生まれたものではなく、他地域から来たクリュニーや教皇によってもたらされたのである。

第2節 聖ヤコブ(サンティアゴ)とレコンキスタ

レコンキスタが「聖戦」とされた背景には、カトリック教の聖人ヤコブの影響もうかがえる。レコンキスタの最中、兵士は聖ヤコブ(サンティアゴ)の名を呼び、自軍を鼓舞していたことから、ヤコブと聖戦とが結びつけられるようになったといわれるが、キリスト教徒兵士が「サンティアゴ！」と叫べば、イスラーム教徒兵士は「ムハンマド！」と叫ぶのが通例であったように、戦いの前に守護聖人や神に祈るのは、戦闘に向けて士気を鼓舞する、「儀式」であると私は考える。そのうえ、聖ヤコブを守護聖人とするサンティアゴ・デ・コンポステーラとはカタルーニャ人の聖地であり、カスティーリャ人にとっての聖地ではなかった。しかもこの時代、イベリア半島全体で信仰を集めていたのは聖母マリアであり、サンティアゴとはコンポステーラの一守護聖人にすぎなかった。したがって、聖ヤコブ信仰やサンティアゴ・デ・コンポステーラ巡礼を、直接的にレコンキスタという現象と結びつけるのには無理がある。

また、マタモーロス(モーロ人殺し)との異名をとり、キリスト教徒にとってレコンキスタの精神的支柱となっているサンティアゴのイメージは歴史的誤訳によって生まれたものである。ギリシア語文献に書かれた聖ヤコブが埋葬されている土地「マルマリカ」(現在のリビアあたり)は、ラテン語に翻訳される際、「マルモリカ」と誤訳された。大理石という意味のラテン語「マルモリカ」に由来する、現在のサンティアゴ・デ・コンポステーラの古名は「アルキス・マルモリネス」(大理石の墓群)である。つまり、ヤコブの墓は大理石にあるという誤訳が、聖ヤコブとアルキス・マルモリネスを結びつけたのである。この歴史的な誤訳により、サンティアゴがスペインに

伝道した、という説が広まり、813年にこの地でヤコブの遺骨が「発見」された。これを機に、アルキス・マルモリネスはサンティアゴ・デ・コンポステーラに、サンティアゴはスペインの守護聖人になったのである。

また、サンティアゴがレコンキスタの象徴となった背景には、絵画の影響も指摘できよう。初めのうちは一般的な使徒として描かれていたサンティアゴは、13世紀頃から長い杖と帆立貝を身につけた姿で描かれるようになる。サンティアゴのこの姿とは巡礼者を模したものであるにもかかわらず、巡礼者たちの目指すフランスからサンティアゴ・デ・コンポステーラに至る巡礼の道とは、当時のイスパニア人にはまるでなじみのないものだった。また、サンティアゴを描いた絵画には、騎士の格好をしたサンティアゴがイスラーム教徒を制圧している姿も多くみられる。だが、その原案とはアルザスの画家の描いた絵画にたどられるという。

第4章 レコンキスタは「聖戦」ではない 戦争作法、宗教建築からの考証

レコンキスタと聖戦意識について前章では述べたが、本章ではレコンキスタが最初から聖戦として、宗教的情熱により始まった訳ではない理由のみを取り上げて、考証していく。

第1節 戦争作法の違いからの考証

イスラーム教徒の駆逐を推し進めるクリュニーと教皇の思想と政治介入は当時のイベリア半島では警戒心をもって迎えられ、イスラーム教徒とキリスト教徒とは必ずしも宗教的な敵ではなかった。むしろ、互いに同盟もすれば戦争もする、一般的な隣人であった。

イベリア半島におけるクリュニーや教皇に対する反発は、利害関係の対立に依るものであると同時に、イスラームに対する価値観の違いにも起因していた。フランスでは、「イスパニアはキリスト教徒の土地であり、イベリア半島解放後、イスラーム教徒は駆逐されるべきである¹⁴」と考えられていたのに対し、イスパニアの年代記は「イベリア半島がキリスト教徒の土地であることは認めるものの、イスラーム教徒侵入の原因を西ゴート王国の衰廃に帰し、ただ単に西ゴート王国の正当な継承者であるアストゥリアス・レオン王国の手によってその土地を取り返すことが戦いの目的である」と記している。

イスパニア人のレコンキスタが東方十字軍と決定的に異なる点は、戦闘勝利後の敗者の

¹⁴ 異教徒の根絶や改宗の強要はキリスト教の教えに反するにもかかわらず、である。

扱いである。イスパニア人は、「戦闘後の降伏条件の遵守は当然で、無抵抗の民に暴力を振るい、降伏条件を無視して資産を奪うような真似は蛮行である」と考えていた¹⁵。しかし、十字軍では婦女子への暴行や、男子の虐殺などの蛮行は日常茶飯事であった。これはイスラーム教徒を憎むべき相手と考えるか、利害の一致しない相手と考えるかの違いであろう。

そのうえイベリア半島では宗教の違いが人々の不協和を生むというより、むしろ信仰の違いを前提として、人々が互いに共存しあう様子がうかがえる。例えばカスティーリャ王国のアルフォンソ6世(Alfonso VI, 1040年-1109年)も、「二宗教の皇帝」を名乗り¹⁶、トレドを平和共存の地にしようと画策した。また、キリスト教徒の傭兵が報酬などの条件次第でイスラーム教徒側の傭兵になることも珍しくなかったようである。

第2節 宗教建築からの考証

このような戦争作法の違いは宗教建築にも表れている。アラゴン、カスティーリャ地方にはムデハル様式という建築が数多く残っている。ムデハルとはキリスト教徒により再征服されたイスパニアに残留を許可されたイスラーム教徒のことで、これらの地では12世紀から16世紀にわたって彼らの優れた建築技術や美術様式が流行した。世界遺産にもなっているアラゴン州テルエルのサンタ・マリア大聖堂はその代表にあたる。この大聖堂は、現在もその建築美で訪れる人を魅了している。

また、コルドバのメスキータも数奇な運命を辿った建築物である。メスキータは西ゴート王国によって建設された教会であったが、8世紀頃に後ウマイヤ朝が北アフリカからコルドバに逃れてくると、この教会はイスラーム教のモスクとしても使用されるようになった。さらに756年に後ウマイヤ朝がコルドバにウマイヤ朝を再興すると、8世紀末にイスラーム教徒がこれを完全に取り、改築してモスクとした。最終的には16世紀にカルロス1世がモスク中央部にゴシック、ルネサンス折衷の教会を建設し、現在に至る。宗教的な敵ならば二つの宗教で同じ教会を分かち合うこともなく、またモスクを改築してカトリック教会にするはずもない。この点においてもイスパニア人にとって、またイスラーム教徒にとっても、宗教的他者は根絶すべき観念的な敵ではなかったことが見て取れる。

¹⁵ Whosoever kills an innocent human being, it shall be as if he has killed all human mankind.

¹⁶ この言葉の裏には、将来的にアル・アンダルスを統一する意図がある。

第5章 異教徒に対する認識の差異の根源

第1節 ベルベル人とフランクの侵入

ではなぜ同じキリスト教徒においてこのような認識の差異が生まれたのであろうか。それは「実際のイスラーム教徒を知っているか。」という点で決まったと考えられる。当時イベリア半島にはイスラーム教徒が大勢定住しており、経済交流や文化交流が盛んに行われていた。イスパニア人にとってイスラーム教徒は商売もするが喧嘩もする、隣人であった。イスラーム教徒を実際に知っているが故に、フランス人のような抽象的で観念的なイスラーム教徒観は抱かなかった。

しかし、12世紀になると北部からイスパニア人とは異なる「イスラーム教徒観」を持ったフランクが、そして南部からはジブラルタル海峡を渡り宗教に熱心で好戦的なベルベル人が入って来たため、イベリア半島は混乱の時代を迎え、これまで保たれてきたイスラーム教徒とキリスト教徒との共存関係が次第に宗教的対立の色を増してゆくのである。これはクリュニーや教皇により異教徒観がもたらされたにもかかわらず、イスラーム教王朝との同盟関係が進展を見せた11世紀とは大違いである。

イベリア半島の宗教事情を変えたベルベル人、つまりイスラーム教王朝であるムラービト朝とムワッヒド朝の上陸とは、イスラーム教徒諸王の要請によるものであった。アンダルス人の零落ぶりに憤慨したベルベル人の王は後にこの地を支配下に治めたものの、アンダルス人とベルベル人での連合が組めないまま戦闘に突入したために、結局のところキリスト教国に粉砕された。

そして12世紀、13世紀とイベリア半島では両陣営内乱と戦闘が続き、イベリア半島最後のイスラーム教王朝、ナスル朝グラナダ陥落の1492年を迎える。

第2節 異教徒は未知の観念的な敵

結論の章で叙述するが、現在世界で起きている問題の多くは、個人レベルからも解決に向かうことができる問題であると私は考える¹⁷。フランスで問題となっているイスラーム教徒移民の問題も、互いに距離を作るから奇妙な存在になるのであって子供のころからイスラーム

¹⁷ 私は国際政治に関してはリアリストだが、人間関係に関してはリベラリスト的な視点も忘れずにいたい。

教徒について学び、交流すれば「お隣さん」になれるはずだ。イスラーム教徒について学ぶことは、アブラハムの宗教について学ぶことであり、自身の宗教をより深く知ることになる。

また、イスラーム教徒側も「西洋」をもっと学ばなくてはならない。ウサーマ・ビン＝ラディンがテロを起こした動機の一つに、サイイド・クトゥブ(Sayyid Qutb, 1906年-1966年)にみられるようなイスラーム主義急進派の思想 - 「西洋は墮落した文明であり、イスラーム共同体はその墮落に染まることなく、預言者ムハンマドのいた原初の理想的なイスラームに回帰すべきである。」という動機がある。しかし彼自身は実際にアメリカを訪れたことはなく、クトゥブやアッサム(Abdullah Yusuf Azzam, 1941年～1989年)の影響を受けたと述べている。つまり、現代のテロ問題は相手を知らないために不安になり、恐怖を感じ、過剰防衛しなければならず、その防衛が相手にとってまた同様に恐怖になり、相手も不安になり・・・という悪循環に陥っていると考えられる。まさに今必要なのは、隣人愛ではないだろうか¹⁸。

第6章 結論 結びにかえて

第1章から第5章までレコンキスタの歴史から始まり、レコンキスタの聖戦意識の根源、レコンキスタは聖戦ではないという論旨の展開、異教徒に対する認識の差異はどこから生まれたかについて記した。「宗教戦争とされるものの根源的な要因は経済、領土問題である」という主張は上記の裏付けによってなされる。

本章では、レコンキスタが単純、純粹に宗教的動機に基づいた戦争ではなく、領土的、経済的動機の方がより強い戦争であるとの認識に基づいて、宗教を考え、結論としたい。

第1節 他者を知ることの必要性

アメリカ同時多発テロ事件を起こしたウサーマ・ビン＝ラディンは前述の通り、欧米を訪れたことがなかった。勝手に膨らんだ他者に対する認識と敵意が、テロ事件の背景にあったのであろう。ロンドンで起きた同時爆破テロの主犯の動機も「イスラーム社会に対し不正義な西洋に対する反目」というものであった。

もちろんこれらの動機にはイスラエルの問題、中東和平に絡む問題など、テロリストの主張が一理ある面もある。かつてのイギリス外交が今でも中東を分裂させているし、アメリカのイス

¹⁸ Love your neighbor as yourself. 皆、アブラハムの子である。

ラエル優遇策とも取られかねない政策にイスラーム社会が反発していることは言うまでもない。しかし、それはどの宗教でも禁止されている無辜の民を殺傷してよい理由とはならない。

つまり、イスラーム教徒が西洋をもっと知ることが必要なだけでなく、西洋ももっとイスラーム教徒を知らなければならない。現在フランスで起こっている、学校に女子生徒がスカーフを付けてくるのは合憲か、という問題も、フランス政府は厳密な政教分離のみに重きを置くのではなく、個人の内面に横たわる深い信仰にもっと目を向けなくてはならない。

また、移民のコミュニティを孤立させないことも必要であろう。分離政策は「区別」と呼べる範囲内でおこなわれるならまだしも、移民を完全に差別し、孤立させてしまう場合、彼らの阻害感を一層強め、それが反発を招き、その反発がさらなる孤立を生むという悪循環を生む。これでは現代の宗教間共存は望めるはずもない。

一方、現代の多文化主義、価値観の多様化もこの問題を顕在化させることに一役買っていると考える。多文化主義を謳歌している人間は良いが、中には多文化主義により、他人と広く浅い関係になり、自身の帰属意識を失いつつある人もいる。そして帰属意識の根源として、間違った方法でナショナリズムを選び、右傾化してしまっている人もいる。ナショナリズムは自身の帰属を誇るためのものであり、他人を攻撃するためのものではない。それを間違っ

てはいけない。

このままではハンチントンの指摘するように、文明は衝突してしまうこともあろう。しかし、宗教間共存には暗い話題ばかりではない。近年では、オバマ大統領が大統領選挙の際、保守層からの反発を避けるためにミドルネームのフセインという文字を封印したが、SNS 上などで、自身のミドルネームに「フセイン」を入れ、オバマへの支持を表す動きが広まった。イスラーム教徒の代表的な名前であるフセインを認めるというのは、イスラーム社会を間接的に認めることにも繋がったといえるのではないか。

第2節 宗教的対立解決のためのヒント

レコンキスタが宗教的情熱から始まったのではなく、入植という経済的、領土的な問題から始まったこともこの問題解決のヒントになっていると考える。一方、十字軍にも教皇の権威づけという世俗的な理由が多分に含まれ、第四回十字軍などに至っては、ヴェネチア等による商売敵の制圧という経済的な理由が主であった。

現在、イスラーム教とキリスト教の間に大きく横たわる中東の問題も、結局は領土の問題で

あり、互いの宗教を必ず嫌わなければならない直接的な理由はない。この解決のためには、もちろんアメリカのキリスト教国家重視戦略の是正や、イスラーム教徒の西洋への劣等感の解消などという「宗教的和解」が必要だが、それ以上に領土的、経済的な問題解決が重要であるといえるのではないだろうか。

このように、「宗教対立」が引き起こす諸問題を解決する際、領土、経済の観点を積極的に持ち込むと、信仰という観点を薄めることができると思うのである。一神教の信徒同士の争いは、宗教的に解決してはならない。一時的に解決しても、禍根が残る。よって双方が互いの信仰を尊敬しつつ、譲れる部分で譲っていかなくてはならない、ということ、中世のスペインは教えてくれているのではないだろうか。

イスラーム教徒との、キリスト教徒との共存は難しいことではないと私は考えている。そのためにも宗教的共存をまず自身の話題と考え、他者との共存を探ろうと行動することが他者を知るための近道であると考え。何も他者とは宗教間のみにあてはまる言葉ではない。言ってしまうと自身以外の皆が他者なのだ。他者に目を向け、他者を思うことが共存には不可欠である。

今、世界に必要なのは、empathy ではないだろうか。

主要参考文献一覧

ワシントン・アーヴィング『アルハンブラ物語』平沼孝之訳、岩波書店、1997年。

芝修身『真説 レコンキスタ “イスラーム VS キリスト教”史観をこえて』書肆心水、2007年。

シャルル=エマニュエル・デュフルク『イスラーム治下のヨーロッパ 衝突と共存の歴史』芝修身、芝紘子訳、藤原書店、1997年。

ジョージ・パッカー『イラク戦争のアメリカ』豊田英子訳、みすず書房、2008年。

サミュエル・ハンチントン『文明の衝突』鈴木主税訳、集英社、1998年。

ローレンス・ライト『倒壊する巨塔 アルカイダと「9.11」への道』平賀秀明訳、白水社、2009年。

D.W.ローマックス『レコンキスタ 中世スペインの国土回復運動』林邦夫訳、刀水書房、1996年。

Lowney, Chris. *A Vanished World. Muslims, Christians, and Jews in Medieval Spain*. New

York: Oxford University Press, 2006.

聖ヤコブに関するサイト

<<http://www4.pf-x.net/~suisen/christ/iacomj.html#art>>